

## 「宮沢賢治考」

2018年02月05日

2016年下半期の直木賞は、恩田陸氏の『蜂蜜と遠雷』が受賞した。音楽オンチの私には、音楽家たちの鍛錬と緊張を興味深く読んだ。ノーベル文学賞を受賞したカズオ・イシグロ氏は小説というフィクションで捉えた社会像を見ることに意味があると語っていた。

2017年下半期の直木賞は、門井慶喜氏の『銀河鉄道の父』が受賞し、評判になっていると聞き、読んでみた。宮沢賢治の父・政次郎から見た賢治を描いた小説である。賢治は、父が営む裕福な質屋の息子に生まれ、何自由なく育った。賢治は優秀な子で、進学したいと願っていた。祖父・喜助は「質屋に学問などいらない」と言ったが、父は進学を認め、中学校に行き、農林学校で学んでいる。学校で、農民たちに農業技術を教えたりする中で、詩と童話を書き続ける。地方紙に掲載されたりするが、全てが中途半端で、父の支援で生きていく。「おらはこれまで、口先だけの人間でした。詩人としては生きることの苦しみを書きつらね、教師としては『立派な農民になれ』と子供達を叱咤してきた。んだどもおら自身、ちっとも農民の苦しみを知らなかったのす。いまこそ、体で知らなければ」という言葉が賢治の心を表していると思った。愛する妹・トシの死は賢治にとって衝撃であった。その頃から、噴き出て来る詩や童話を狂気のように書き溜める。二冊の本を出版するが売れず、母・イチに見とられ、病弱だった37年の生涯を急性肺炎で終える。賢治の死後、にわかに注目されて、全集が出され、父は喜ぶ。賢治の生涯において、父は夢を追いかける賢治を理解し、苦悩しながらも、あらん限りの愛をもって支える。病床での看病などは圧巻である。「帯」には「父でありすぎる父親が宮沢賢治に注いだ無上の愛。感動の『親子』小説！」と書いている。こんな父親がいるのだろうかと思ってしまった。

2017年2月に、今野勉氏が『宮沢賢治の真実 修羅を生きた詩人』を著わし、蓮如賞を受賞している。今野氏は、賢治の文語詩の謎めいた言葉の説き明かしから書き始めている。そして、詩を追いながら賢治の実像に迫っていく。賢治がいかに言葉にこだわったかが分かる。賢治が愛した妹・とし子（本名＝トシ、賢治はとし子と書いている）は、恋愛が新聞沙汰になり、日本女子大学に転校せざるを得なくなった。妹が失恋の痛手を書いた「自省録」を読み、賢治は衝撃を受ける。賢治自身も入院中に、看護婦との初恋もあるが、同性の保坂という友人に恋焦がれ、熱烈な恋歌を送っている。保坂は受け入れられず、去って行く。その時の心情を「冬のスケッチ」で歌っている。「げにもまことのみちはかゞやきはげしくして 行きがたきかな。行きがたきゆゑにわれととどまるにはあらず。おゝつめたくして呼吸もかたくかゞやける青びかりの天よ。かなしみに身はちぎれ なやみにこころくだけつゝ なおわれ天を恋ひしたへり。」とし子の失恋の痛みと、保坂との別れの失意が重なり、千切れるほどの悲しみ、心が碎けるほどの苦悩を負ったが、その先に自分を救ってくれる光があるはずだと信じる心が、新たな詩を生み出していると、今野氏は解説している。人間の心は自分で御すことができない。賢治は御すことのできない心を「修羅」と言っている。その修羅の中から、生けるものを限りなくとおしむ作品が生まれたのである。論述は多岐にわたるが、興味深いのは賢治の宗教観である。父・政次郎は浄土真宗の門徒で、高僧を招いて講習会を開くほど熱心であった。ところが賢治は、「南無阿弥陀仏」と念仏して来世の救いを求める他力本願よりも、現世の救いを説く「南無妙法蓮華経」の日蓮宗にのめり込んでいった。農民を救いたいという現実主義者だったのだろうか。二人の著者が違う視点から描く賢治には限りない深みがある。